

小説 あらおし悠

挿絵 しまちよ

立ち読み版

うちのメイドは  
**メイドが  
アイドル!**  
MY MAID IS MAID IDOL!

プロローグ　うちにメイドがやって来た！

第一章　メイドがアイドル!?

第二章　先輩アイドルの困った性癖

第三章　小生意気な後輩にご奉仕指導

第四章　デビューイベントと本当の気持ち

第五章　ご主人様とメイドの契約

エピローグ　ずっとご主人様のメイドでアイドルです

# 登場人物紹介

Characters



## さくらまつり 佐倉祭理

バイトで家政婦としてやってきた新人アイドル。アイドルとして売り出す方向性を模索中。頑張り屋ながらドジっ子な一面も。



おももり

## 大森ゆみか

祭理と同じ事務所の先輩。マイペースで、話し方もおっとりなお姉さん。おムネがたっぷりで魅力的。



しらはまは ずみ

## 白浜羽澄

祭理と同じ事務所の後輩。強気な性格が困りものながらコスプレは結構ノリノリ。実はお嬢様。

## さかいたかや 阪井孝也

アイドルに多少詳しい少年。両親の海外赴任で一人暮らしを謳歌しようとしたくらむも!?

「ゆ、許されませんか……」

「へ？ わあああつ!!」

自分でも驚くほどの悲鳴を上げ、孝也は危うくお湯の中で溺れかけた。誰もいないはずの家の、誰も入ってこないはずの浴室で声が出たのだから、驚くなどという方が無理だ。

ばしゃばしゃと大量にお湯を零しながら浴槽の縁にしがみつけば、洗い場の向こう、脱衣場へのガラス戸をわずかに開けて、メイド服の少女が顔を覗かせている。

「お、女が男の風呂を覗くな！ じゃなくて！ どこから入って来たんだよ!!」

「玄関が開いてました……」

それは自分の不注意。だからといって、勝手に侵入していい理由にはならないだろう。

「それは分かったけど……何でいるの！ クビを覚悟して出て行ったんじゃないのか!!」

「ご迷惑を掛けっぱなしでは、あまりにも申し訳なくて……なので、何かひとつでもお役に立ってからと思って……」

口調は遠慮がちなが、輝く瞳とグッと握った手は、なぜそんなに思うほど力強い。

確かに、家政婦のチェンジは考えていた。本音では、正直これ以上の被害の拡大は避けたい。しかし彼女への同情が、その決断を鈍らせる。

「お願いです、ご主人様！ わたしにご奉仕させてください！」

孝也が躊躇して、なかなか返事をしないことに焦れたのか、祭理はガラス戸をガラッと全開にして身を乗り出してきた。

「わあ！ 入ってくるなよ!!」

「せめて、ご主人様のお背中を流させてください！　そ、それくらいなら、わたしでも失敗しないと思うので!」

そればかりか、タイルに正座して三つ指をつく。孝也の浅慮は、そこまで彼女を思い悩ませてしまったというのか。

（そりゃあ、あんな追い出し方しちゃったもんなあ……）

祭理から見れば、孝也の逆鱗げきりんに触れたと感じてもおかしくない。こんな必死な態度も、彼女の責任感の強さのせいと思えば、止めることはできなかった。

それに彼女の言う通り、背中を流すくらいなら他に被害も出ないだろう。そう思った孝也は、申し出を受けることにした。

「分かったよ。お願いする。だから立つて。それじゃ服が濡れちゃうよ?」

「あ、はい！　そうですね」

孝也に促され立ち上がった祭理だが、スカート部の前面はすっかり濡れてしまい、色が変わっている。すると彼女は何のためらいもなく裾をたくし上げ、エプロンの紐に挟み込んできました。

（お、おいおい……!）

彼女に他意は感じられない。単に作業をしやすくするために過ぎないのだろう。だが、その無防備な行動によって、孝也は目のやり場に困る羽目に陥った。

付け根近くまで露わになった、白い素足の太腿。細くて綺麗な指の爪先。ほっそりとしていながら、ほどよい肉づきの脚が描く微妙なラインが、思いがけず悩ましい。濃紺のメイド服が脚の白さを際立たせ、牡の劣情を煽り立てる。

(や、やばい……)

股間で、不穏な気配を感じた。彼女が来るまでは何ともなかった分身が、電燈に照らされる脚線に反応し、ムズムズと蠢き始める。

「さあどうぞ、ご主人様。お背中お流しいたします」

膝について、今度は祭理が手招きする。だが、湯船から動けない。出るに出来ない状態にまで、孝也の肉体は変化していたのだ。股間が徐々に鎌首をもたげる。ズキズキと疼くように脈動しながら、太さも長さも膨張していく。

(こ、こいつ……っ！ おとなしくしてろっての！)

持ち主の命令に背いて、完全な勃起状態を完成させる男性器。思わず掴んだ分身の鋼のような硬直ぶりに、背中が冷や汗でべっとり濡れる。

「ご主人様、早く出ていただかないと、お背中流せません」

ぷくつと頬を膨らませ、祭理が催促する。その子供っぽい仕種にまで勃起は激しく反応し、痛いほどの勢いで、身体を強張らせた魚のようにビクンと跳ねた。

「あゝ、分かつてとは思うけど……俺、今、素っ裸だよ？」

なぜかは知らないが、その言葉の意味を即座には掴みかねたらしい。祭理は、しばしキ

ヨトンとした顔で孝也を凝視し、そして、急速に頬を真っ赤に染め上げた。

「きやああああ！ すみません、すみません！ そそそつ、そうですよねッ！」

奉仕することで頭がいっぱいで、本気で忘れていたのだろう。目の前の男が、一条纏まとわぬ全裸であることを。どうせ奉仕の内容もここに来るまでまったくの白紙で、たまたま孝也が風呂に入っていたから、背中を流すと言いついに決まっている。

「はわわっ……どどど、どうしよう……。そ、そうだ！ わたし、目を閉じてます！」

赤らめた頬を両手で押さえ、あたふたと視線を泳がせながら、それでも祭理が見出した解決策は、何とも頼りのないものだった。長い睫毛が伏せられ、垂れ気味の眼を目蓋が隠す。本人はいたって真剣なのだろうが、これにはさすがに孝也も不安を訴える。

「ええっ！ それだけ!？」

「絶対的に、見ません。お約束します」

自信たっぷりなのが、逆に不安を煽る。もちろん、祭理が嘘を吐くとは思っていない。短い逡巡の末、孝也は素直に、しかし念のためにタオルで前を隠してお湯から上がり、プラスチック製の小さな椅子に腰を下ろした。

「本つつ当に、目を開けるなよ！」

「本つつ当に開けません！ 信用してください！」

考えてみれば、ここで逃げ出してもよかった。だが下半身の興奮が、冷静な判断力を失わせていた。女の子の手で洗ってもらえるという魅惑的なシチュエーションに、惹かれず

にいられなかったのだ。このチャンスを逃すなんて、もったいない。牡の本能にそのかされた孝也は、彼女にこの身を委ねる誘惑に、すっかりのぼせ始めていた。

「そ……それじゃ、お……お……お願ひします」

「……………はい。かしこまりました」

無意識に唾を飲み込み、声が裏返る。それを不審とも思わない少女の健気な声に、下半身で欲情している孝也は罪悪感で胸を刺された。

（この硬くなってるヤツだけは、絶対に隠さなきゃ……!）

彼女の真剣な申し出を、劣情で汚してはいけない。もし勃起していると知られたら、いくら従順な祭理でも軽蔑するに決まっている。それを、孝也は異常なまでに怖れた。

「……………」

「……………」

奇妙な緊張感が浴室に張り詰める。なのに、一向に背中に触れてこない。その代わりに、背後でゴソゴソと何かを探るような気配がする。

「……………う、うわぁ! な、何してんだ!」

孝也は思わず絶叫した。信じられないことに、彼女は眼を閉じたまま立ち上がって、探し物をしていたのだ。

「え? あの、ボディソープはどこにあるのかと思って……」

「バ、バカ! そういう時は眼を開けていいんだよ!」



「で、でもご主人様と約束を……えーつと……きやああああ!!」

馬鹿正直にもほどがある。彼女は浴槽に脚を引っ掛け、お湯の中に真っ逆さまに突っ込んだ。

「がばごばがば……ぐばっ!」

「お、おい! 大丈夫か!」

湯から飛び出した下半身がジタバタ暴れる。おのずとスカートもずり下がってパンツが丸出し。だがそこから眼を逸らすわけにもいかず、孝也は彼女のお腹を抱えてお湯の中から引っ張り出した。

「ぶはっ……ぶあー! し、死ぬかと思いました……」

「それはこっちのセリフだ! 心臓が止まりそうになったつての!」

浴室の床にお尻をつけ、ぺたんこ座り込んだ全身ずぶ濡れのメイド少女。彼女は、ある一点を凝視したまま動きを止めていた。孝也は立ち尽くした状態で、その視線を辿る。そして、見開いた瞳が何を見ているのかを知る。

「うわあああつ! バ、バカ見るな!」

「きやあ!!」

孝也の怒号で我に返った祭理も、小さな悲鳴を上げて顔を覆った。だが、指の隙間からしっかりと覗いている。彼女の視線を感じて身を硬くする、孝也の股間の勃起肉を。

「あの……あの……それ、それって……!」

知られた。見られた。その単純な事実は、想像以上のショックとなつて孝也を襲つた。それなのに、勃起はなおも天井を指して、ズキズキと激しく脈打ち続ける。

「こ、これは……ごめん！」

両手で股間を隠す。おのずと肩が窄まる<sup>すぼ</sup>情けないポーズになるが、それが今の孝也にできる精一杯だった。

「……どうして、謝るんですか？」

浴室の壁に反響する少女の声は、なぜか妙に静かに聞こえた。恥ずかしさと自己嫌悪で逸らしていた目を彼女に戻す。頬を染め、唇をわずかに開き、濡れた瞳が自分を見上げている。不思議そうに、見詰めている。

「お……男の人がこうなるのって、エ、エ……エッチなこと考えたから……ですよね？」

「し、知ってるのか？」

「もちろんです。わたしだって……その……お、女の子、ですから……」

それは、年相応に知識があるという意味だろうか。それとも――。

「それって……ご主人様が、わたしでエッチな想像したつてことですか？ ……だとしたら……嬉しいです」

「う、嬉しい？ 怒るんじゃないくて？」

彼女の口調に責めている気配はない。それどころか、ただでさえ垂れ気味な目尻をさらに下げ、唇を綻ばせた。

「だって……それって、わたしを一人前の女の子として見てくれたってことだから。わたし、いつも失敗ばかりで、周りの人にダメな子としか見られてないっていうか……。だから……嬉しいです。それに……」

どうかしている。仕事で半人前扱いされるのと、女の子として欲情を向けられるのを同列に比べるなんて。それに、下着を見られた時は、あんなに騒いでいたのに、この落ち着き方は何だろう。祭理は、小さく震える指先で、勃起を隠す孝也の手に手を重ね——そして、信じられないことを口走った。

「ご主人様……ご主人様のそれ……わたしに……ご奉仕、させてください……」

桃色の唇から漏れる、小さくて妖しい囁き。震えるその声は、緊張しているのかと思った。だが違う。口元は薄く笑みさえ浮かべている。熱く濡れた、その瞳に映しているものを見て、孝也は確信した。

間違いない。彼女は、このずぶ濡れメイド少女は、勃起を見て欲情している。

「じ、自分が……何を言ってるのか、分かっているのか？」

止めるようなセリフを吐きながら、孝也の声は期待で震えた。掌の中で、肉塊がドクンと鼓動を打つ。彼女の指が、そよ風よりも穏やかに、勃起を隠す手を払いのけた。まるで催眠術に掛かったように、孝也は、彼女に股間を晒してしまう。解放された肉茎が、パネ仕掛けかと思うほどの勢いで大きく跳ね上がる。

「ヒッ……」

祭理が上げた短い悲鳴で、孝也は我に返った。知り合って間もない女の子に、欲情した性器を見せつけるなんて。

（な……何してんだ、俺は……！）

浮き出た血管。キノコの笠のように膨れた亀頭。見慣れた自分の一部なのに、彼女の無垢な瞳で見詰められると、ひどく醜いものに思えてくる。早く隠さなくては思っているのに、身体が強張って思うように動かない。

「……………ン、ふう……………はああ……………」

孝也より、祭理の方が早かった。驚愕の色はすぐに鳴りを潜め、杭のような肉茎に手を伸ばしてきたのだ。触れる直前、小さく痙攣した肉塊に驚き指を引っ込める。だがその程度ではためらうことなく、彼女はついに、震える肉塊を五本の指で捌め捕った。

「……………うッ！」

たったそれだけの接触が、孝也の全身を甘い電流で貫いた。自分の手ではありえない甘美な痺れが脳天まで一気に駆け抜け、射精したかと思うほどの衝撃で肉棒を暴れさせる。

「うあ……………ッ！ あああッ!!」

孝也が急に大声を上げたので、祭理が指を離してしまった。

「ごめんなさい！ わたし、男の人のって、見るのも触るのも初めてで。……もしかして痛かったですか？」

「初めてって……………本当に？」

「あ、当たり前じゃないですか……！ 初めて、です……」

恥ずかしそうに目を伏せ繰り返す祭理。信じられない。確かに孝也のものを見て驚きはしたが、こんなに大胆に触れてきているのに。

「わたしだって、女の子です……。男の人の身体に興味持つの……当たり前、です……」

驚愕する孝也に、彼女はモジモジと膝を擦り合わせた。正直すぎる告白と、それに似合わない清純な笑みに、胸がキュッと締め付けられる。

「それであの……痛かったですか？」

「い、いや違うよ。あんまり気持ちよかったもんだから……」

彼女に釣られ、つい、孝也も正直に答えてしまった。すると、どこか不安そうだった祭理は顔をパッと赤らめ、慈しむような手つきで勃起を撫でた。

「教えてください、ご主人様。どうすれば、気持ちよくなりますか？」

興味はあっても知識はないのだろう。彼女は教えを請いながら、張り詰めた裏筋を撫で上げた。だが、その触れるか触れないかの力加減が焦らされるかのようで、孝也は思わず自分のものを右手で握り締め、軽くひと扱き<sup>しご</sup>してしまう。

「な、なるほど。こうするんですね？」

図らずも、祭理に男の自慰を教える形になってしまった。彼女は孝也に倣<sup>なら</sup>い、右手で肉棒を包み込んだ。二人の掌が硬肉を挟み、指が複雑に絡み合う。

「う……こんな、あ……クッ！」

「ああ……本当に硬い。それに、はあ……ズキズキして、熱い……です。これが……男の人の……。はあ……ンッ、はあ……。本当に、痛くないんですか？」

男根の逞しさに、祭理が唾を飲み込んだ。孝也が首を振って快感を伝えると、彼女の頬が歡喜のピンクに染まる。愛撫も次第に熱を運び、ご主人様に合わせて速度を速める。

（はあ……ど、どうして……こんなことに……）

ついさつきまで、普通に風呂に入っていただけに、女の子と一緒にペニスを扱っている。愛撫としては未熟以前の問題で、握力も足りなければリズムも悪い。だが、異性に触られているという初めての体験が、触感以上の気持ちよさで孝也を悶えさせていた。

「はあ……ンッ、あがつ……はおああ……！」

彼女の指と触れ合っている肉竿が熱くて、疼いて、腰の奥から溶けてしまいそうだ。膝に力が入らない。孝也はガクガクと下半身を痙攣させながら浴室の壁にもたれかかる。

「気持ちいいですか？ ご主人様あ……」

欲情の笑みを浮かべる少女の猫撫で声が耳をくすぐり、孝也は切なげに背筋を悶えさせた。彼女に扱き方を教えるように、捻りを加えてペニスを苛める。

（き、気持ちいい……！ で、でも、こんなの……！）

まだ、たいして親しくも深くもない仲の女の子に、させていいことではない。

「き、君は……アイドルじゃないか！ ア……ア……アイドル……がッ、こんな、やらしいこと……ダメ……だっ！」

言葉とは裏腹に、少女の手を握り締めてより強い刺激を求める。それでも、彼女はアイドル。まだ少ないかもしれないが、ファンだっているはずだ。アイドルとしての自覚に訴えれば、自分が間違っていることに気づくはず。

だが彼女は手を止めることなく、ニッコリと孝也を見上げた。

「いいえ。今のわたしは、ご主人様のメイドです。ご主人様に悦んでいただくのが、今のわたしの務めで……喜びなんです」

その言葉が嘘でないと証明するように、祭理はペニスを握る手に力を込めた。カリ首の段差まで、指の腹でくすぐりだす。

「おああああ！ そ、そんな使い分け、アリなのか!!」

「アリです。でも、わたしはメイドとして失格だから……。せめて最後に、ひとつでもお役に立ちたいんです。ご主人様に、喜んでもらいたいです」

薄く微笑んでいた瞳が、言葉を連ねていくうちに真摯な光を宿していく。孝也は、その表情にハッとした。彼女が最後の奉仕に來たなんて、愛撫の快感で完全に忘れていた。

（これで最後なんて……そんなの……そんなの、イヤだ！）

こんな拙い愛撫なのに、孝也はすっかり心を奪われていた。これが、初めての異性の手だからだろうか。しかし思考するだけの余裕は、残されていなかった。

「あ……さ、先っぽから、何かヌルヌルするものが……」

鈴口から先走り液が溢れ、彼女の手を濡らす。孝也は右手に加えて左手も自慰に参加さ

せ、無我夢中で両手を動かし、彼女の掌にペニスの臭いを擦り込んだ。

——くちゅくちゅ、ちゅぷ、くちゅっ！

卑猥な粘着音が浴室に響く。祭理は淫液で手が汚れるのもいとわず、一心不乱にペニスを扱いた。孝也は両手を離して、股間を完全に彼女に委ねる。腰の奥まで響く甘い快感に耐えきれず、立っているのもやっとの状態まで追い込まれていたのだ。

「はあ……変な臭い……。ご主人様……。ご主人様っ！ もっと気持ちよくなって！」

「い、いい……。凄くいい！ もっと……。もっと強く握って！ 扱いて！」

初めて快感を叫んだご主人様に、メイドの顔が綻んだ。興奮で震える左手で孝也の太腿にしがみつき、この短い時間で覚えた愛撫で、ペニスを極限状態まで導いていく。

「おぐっふ！ ふぐうあッ！」

いつものオナニーに比べれば、全然刺激が足りない。それなのに、祭理の手の方が何倍も気持ちいい。肉柱が痙攣する。内側で熱いものがグツグツと煮えたぎる。

「はあ……。あ、すごい……。！ お、男のひと、こんなにヌルヌル……。はふああん！」

彼女の切なげな吐息が、背中をゾクゾクくすぐった。もう限界だ。少女の肩にしがみついた孝也は彼女の顔にペニスを突きつけ、無意識のうちに腰を振る。

「も……。もうダメだ、いく……。イク……。！」

肉棒の中を、熱い粘液が駆け上がった。警告なんてする余裕があるはずもない。欲求に駆り立てられるまま、少女の掌の中でピストン運動を繰り返す。





「ち……違うッ、バカ言わないで！ そんなはず……そんなの……ああッ……！」

羽澄は必死に叫んで、ゆみかの声を遮ろうとした。だが否定はしても、彼女の股間は小さな水音を鳴らす。あの生意気な少女が、祭理のフェラチオで欲情している。想像しただけで、孝也の肉棒は完全復活。後始末のため舐めていた祭理の口に切っ先を押し入れた。

「んふ、あっちも準備できたみたい……。それじゃ、祭理ちゃあん、交お替！」

「え……あ、はい……」

ゆみかに呼び掛けられ、祭理がふらふらと立ち上がる。精液を飲んだせい、まるで彼女の方が達したかのような呆けぶり。膝から床に崩れ落ち、後輩の脚にしな垂れかかる。

一方、ゆみかはメイド服をたくし上げ、レモンイエローの下着を見せながら孝也に跨った。しかもその場でパンツも脱いでしまう。

（そ、それに、この触ってるのって……うわああ……）

臍をくすぐる恥毛、そして濡れ恥裂の感触に、孝也の硬直肉棒が軋みを上げる。ゆみかはそれを後ろ手で扱きながら、辱めを受けて脱力する後輩に呼び掛けた。

「ハズミちゃん。あなたに足りないもの、教えてあげる。アイドルにとって何が大事なのか……それを、私たちで、ちゃーんとお勉強するのよ。ふふっ、ふふふ……」

ゆみかが、欲情に濡れた眼で孝也を見下ろす。完全に自分が楽しむことしか考えていない顔で、本当に後輩を教育するつもりか疑わしい。しかし孝也も、奇妙な高揚感で身体を疼かせていた。メイドに跨られ、見下される屈辱感。なのに、淫猥な期待で胸が膨らむ。

「さ、ご主人様……たーつぷりと楽しましょ……」

豊かな乳房がたぷんと揺れた。彼女の指が亀頭を摘まむ。硬直して腹を打つ肉槍を垂直に立て、そして軽く腰を浮かせると、自らの身体に突き刺した。

——じゅぶ！ ずぶぶぶ……ずぶつ！

「ふああああ……入っ……たあ……」

「うお……あ、はあああ……」

柔らかな媚肉に肉棒が包まれ、危うく精を漏らしそうになった。直前に祭理の口に放つていなければ、挿入に未熟なこのペニスは、本当に射精していたかもしれない。

「ウソ、挿<sup>は</sup>った……挿<sup>は</sup>っちゃった……」

羽澄の困惑と混乱に満ちた眩きが、孝也の耳に届く。無理もない。先輩が孝也なんかのメイドをしているだけでも信じられないだろうに、身体の関係まであったのだから。だがショックを受けている彼女を氣遣う余裕は、今の孝也にはなかった。

「い……いい、あ……ッ！」

一部の隙もないほど吸いつく小陰唇。はちきれそうな根元をグイグイ締め付ける膣口。そして彼女の内部では、蠕動<sup>ぜんどう</sup>する肉壁が肉棒を奥へ奥へと飲み込んでいく。まるでそこだけ別の生き物のように蠢いて、若い肉茎を嬲るように責め立てた。

「はうううっふ！ きゅふううん！ ご、ご主人様のおちんちん、大きくて……あああ熱くて……おまんこ、焼けちやいそうッ!!」

彼女の唇から、一筋の涎が垂れる。前のめりになってご主人様の胸に手を突き、前後に波打つ腰で肉棒を扱いた。

「お、俺も動いていいですか、ゆみかさん！ お、俺……俺ッ！」

「ふ……うん……。動いてご主人様……。私の身体、好きなように使って……ふぁッ!!」  
返事なんか待ってられない。じつとしていられずに、ゆみかの腰を掴み夢中で下から突き上げた。彼女が腰を振るたびに、肉襷がペニスに絡むのが堪らない。反撃のつもりだったのが、彼女も腰で円を描いて勃起を嬲り、どちらが責めているのか分からなくなる。

「ふぁん！ ご主人様すご……ッい！ もつと……もつと私でよくなつて……はう、ふうん、くッうううふぁぁぁッ!!」

「がッぁぁぁつ！ ゆ、ゆみかさん……ゆみかさん！」

さっき女の子の口で達した肉槍を、別の女性の秘部に突き刺している。快感に溺れながらも、自分の不誠実さに呆れ、祭理の顔色を盗み見た。

「——ン？ なぁぁぁつ!!」

心の中で、あんぐりと口を開けた。さっきから見学者の声が聞こえないと思ったら、祭理が羽澄の顎を上向かせ、唇を奪っていたのだ。軽く啄み、唇の形をなぞった舌を上から挿し入れる。指は彼女のスカートを捲り上げ、下着の上から股間を擦り上げていた。

「ま、祭理ちゃんっ！ あ……あんたって、こんなことするような娘じゃ……はむン」

祭理はそれに答えず、硬直させた舌で後輩の口腔を犯した。まるで何かから目を逸らす

ように、荒っぽく苛立ちをぶつけるように。

「あむっ……むうう……！」

身動きも取れず、同性の少女に唇を塞がれ、苦悶の表情を浮かべる羽澄。まるで拷問のような光景は、快感の中にあっても、孝也の胸を刺すような罪悪感で痛めた。

「ゆ……ゆみかさん、やめさせた方が……。羽澄ちゃん、苦しそうですよ！」

「うふん……。あれがあ？ ご主人様って、案外と見る眼なあい……。いい、いいッ！」

ゆみかは腰をくねらせ肉棒を貪り、後輩を気に掛けようとしてもしていない。本当にそれでいいのかと疑問に思い始めた孝也の耳に、信じられないセリフが飛び込んだ。

「あふ……。や……。祭理ちゃん、もつと強く……。違う、そこじゃない……。ああッ、お願い……。ッ、ちゃんと触って……。ひゃうん、ああ……。キス、もつとお……。！」

驚いたことに、キスも愛撫も、羽澄の方からおねだりしていた。必死に舌を伸ばし、脚を開いて、祭理の指を快感スポットに導こうとしている。最初の罵り方が嘘のような変貌ぶり。混乱する孝也の耳に、ゆみかが囁き掛けた。

「ハズミちゃんて、ぜーったいエッチに興味があると思っただあ。コスプレの趣味が、ちよつとオタクっぽかったし。でも家では使用人の目があるから、満足にオナニーできなかったはずよ。だから性欲が溜まつてるって思ったら……。んふ、大当たり♪」

孝也は呆れた。それは全部、推測と偏見ではないか。もし間違っていたらどうするつもりだったのだろう。しかし幸いと言うべきか何と言うか、現に羽澄は苦しげに悶え、思う

ように触ってくれない祭理に欲求不満をぶちまけていた。

「お、お願いだから触って！　こんなエッチな見せられて……あたし……あたし……おかしくなっちゃうよおお！」

しかし祭理はわざと愛撫のツボを外し、羽澄の欲情を煽り立てた。

「駄目ですよ、自分だけが気持ちよくなるうとしては。何をすればいいのか、何を言えばいいのか、ハズミちゃんは、もう分かっているんでしょ？」

「はあ、はあ……。そ、そんな……こと……」

羽澄の喘ぎ声が、熱い。フェラチオとセックスを強制見学させられ、肉欲を持て余しているのは誰の目にも明らかだった。淫熱に浮かされた少女の視線が、孝也に、そしてゆみかと繋がっている部分に、揺らめきながら移っていく。

「さあ、言ってごらんさい。あなたが、今、一番したいことを……」

肉棒を引き抜きながら、小さな声でゆみかが後輩に呼び掛けた。全員が息を詰めた静かな部屋で、それは怖いくらい大きく響く。羽澄の目蓋が、まるで催眠術にかかったように半分閉じる。しかし急に顔を背け、何かを呟こうとした唇を噛み締めた。

「そ、そんなこと言えるわけが………あきゅッ!!」

羽澄の声がひっくり返った。歩み寄ったゆみかが、彼女の恥部を<sup>つね</sup>抓り上げたのだ。下着の中心の色が急激に変わる。股間から粘液がどつと溢れ出し、内腿や椅子を濡らす。

「ゆ、ゆみかさん待って！　許して！　クリちゃん抓らないでッ、イگیいいいいっ！」

「いけない娘ね。ちゃんと素直に言わないからよ」

後輩の耳朶を噛むゆみかの顔はＳッ気全開。暴れる太腿を押さえつけ、クリトリスを捻り上げる。だが、孝也は目を見張った。責められているはずの羽澄の眼が、うつとりと閉じられる。涎を垂らす唇には笑みさえ浮かんでいる。

「許して、取れちゃう……クリちゃん取れちゃうよお……」

「あらあ？ んふ、ハズミちゃん、いい顔。もしかして、苛められて感じるタイプ？」

ガクガクと前後に揺れる首は、肯定しているのか震えているのか判断がつかない。しかし、ゆみかが抓った淫核を優しく撫でると、ビクッと背筋を震わせて、酔ったように呂律の回らない舌で、しかし、はつきりと呟いた。

「……ほ、ほ………欲しい……れふ」

「何を？」

ゆみかに促された少女は喉を鳴らし、そして自らの欲求を力いっぱいに叫んだ。

「お、お………おちんちん……欲しい……っ。あたし、そのおちんちん欲しいです！」

「ダメ。その言い方じゃ、おちんちんは、あげられませえん」

「な………何で!？」

ゆみかにダメ出しされて、羽澄は愕然とした。恥辱で顔を真っ赤にして、勇気を振り絞って恥ずかしい言葉を叫んだのに、なぜ合格をくれないのかと。

「あなたはこれから何になるの？ そして孝也さんは、あなたの何？」

カチャリと、羽澄の背後で音がした。外された手錠とロープが床に落ちる。小柄な後輩アイドルは自由になった自覚もなく、ふらふらと孝也の脚の間に跪いた。

「ご……ご……ご主人、様あ……。あたしは……あなたのおメイドれふう。ご主人様のおちんちん、エッチでやらしいメイドの、あらひにくらさい……！」

「……よくできました」

ゆみかは満足そうに微笑んで、羽澄の服に手を掛けた。

「お、おいおい!!」

制止する暇もない。後輩アイドルは、あつというまに全裸に剥かれてしまう。その全貌に、孝也は思わず息を呑んだ。

細い肢体。細い手足。脚の付け根の陰りは薄く、少し離れたら何も生えていないかのようだ。そして何より羽澄らしいのは、想像以上に慎ましい胸。頂点の淡いピンクは肌との境界が不明瞭で、そのくせ中心の小さな突起は、羽澄らしい自己主張でピンと尖る。

「あ……あはあ……お、おとおお……」

孝也はベッドで身を起こし、自分でも訳の分からない呻きを上げた。初めて生で見る、一条纏わぬ異性の全裸に。耳まで真っ赤に染めた顔を逸らす少女の恥じらいが、さっきまでゆみかに包まれていた肉棒を滾らせる。

だが、こんな形で彼女を辱めていいはずがない。聞き分けのない分身を鎮めようとしてグッと握る。しかし羽澄は自らベッドにコロんと寝転がると、まるで仔犬が服従するかの



ように脚を開き、唇から熱い息を吐いた。

「ご……主人、様あ……。は……羽澄、の……発情しちゃった……お、おまんこお……ご主人様の、お……おちんちんで、ずぼずぼして、くささい……！」

どうしてここまで壊れてしまったのか、彼女は自らの指先を秘裂に入れ、湿った肉の音を孝也に聞かせた。溢れた恥蜜が、お尻の谷間に垂れ落ちる。一本の筋にしか見えなかった割れ目が、掻き回されて綻はなつんでいく。

可憐なピンクの襞に心を掻き乱された孝也の横から、祭理がスツと肉棒を掴んだ。その手に導かれるまま羽澄の上に覆い被さり、先端を秘裂にあてがう。

「はあ……うつ、はああ……！」

後は、身体が自然に動いた。孝也は羽澄の華奢な肩を抱き、自分から腰を押し出した。小さなクレバスを掻き分けて、龟头を少女の胎内に埋め込んでいく。

——ずぷり、ず……ずずず……ずぶっ！

「ふ……あああッ、ご……主人さ……まああああッ！」

羽澄が顎を突き上げて、喉の奥から絞り出すような悲鳴を上げた。手足を孝也の背中に絡め、小さな身体からは想像できない力で抱きついてくる。

「裂け……るッ、身体……からだあああッ！」

処女喪失の苦痛に耐えかねているのだと思ったが、挿入は止められない。硬さの残る処女肉が新鮮で、もっともって擦りつけたくなる。

「羽澄ちゃんっ！　ち、力を抜いて……！」

想像以上に手強い処女穴の抵抗で、犯す方の背中にも脂汗が浮き始めた。それでもこの魅惑的な恥肉を味わいたい一心で、強引に突破を図る。

「いくよ羽澄ちゃんっ、君を……貰うよ！」

「ふあッ!!　あ……がッ、く……か……ひイイイいいいあはあああッ！」

ズンと腰をぶつけると、何かを破った衝撃が牡の身体の中を走った。処女膜を破ったのだと理解する前に、強烈な締め付けが肉棒を襲う。まるで絞め殺されるような圧迫感に、焦った孝也は反射的に腰を引いた。

「ひイイイッ！　こ、こすっ、擦れるッ！」

羽澄の悲鳴に、今度は慌てて突き戻した。さらに声にならないような甲高い悲鳴に、未熟なご主人様はパニックを起こす。

（な、何だこれ!!　ゆみかさんのと全然違う!!）

彼女が小柄なせいとか、膣内も窮屈で、締められた勃起が充血していく。この狭い空間で肉棒を膨張させれば余計にきつくなるばかり。勃起が押し潰されそうになって、どうすればいいのかわからず、無闇なピストン運動を繰り返した。

「ひッ、ひふあッ！　あひっ、ひぎいいいいッ！」

張り出したカリ首で処女肉を削られた羽澄は、両腕で首にしがみつки、短い悲鳴を繰り返す。あまりにも苦しそうで痛々しくて、見ていられなくなるが、勃起は新たな膣肉に夢

中だった。少女の肩を搔き抱き、自由な動きもままならない隘路あいろを突きまくる。

「はきゅふああうン！ あちゆい、あそこ、あちゆいよおおおっ！」

抽送に耐えかね、苦痛に顔を歪める羽澄。孝也の背中に爪を立て、ツインテールの頭を振り立てる。これ以上は心苦しくて勃起を抜こうとしたら、彼女の膺が離してくれなかった。拳で握るように扱かれて、快感で痺れる腰を突き入れてしまう。身勝手な自分の身体が恨めしく、犯しながら何度も謝る。

「ごめん、羽澄ちゃんっ。でも俺……お、あああおおッ！」

「ンもう、ご主人様ったら。女の子のことが分かってないんだから。ハズミちゃんも、よがつてばかりいないで、ちゃんとご主人様に今の気持ちを言いなさい」

孝也の頭を、ゆみかが撫でた。そして呆れ半分の笑みで、羽澄の乳首を抓り上げる。

「ひあうふああああンッ！ ご、ごめんなさあああい！ 気持ちいいです！ ご主人様に抱いてもらって、嬉しいですよ！ ン、むううう！」

強制的に快感を叫ばされた羽澄が、唇を押しつけてきた。しかもそれが自己暗示になったのか、彼女の股間が洪水のようにどつと愛液を噴き出す。途端にピストン運動が滑らになった。少女は夢中で孝也の舌に吸いつき、腰を振り立てた。

「ダ、ダメだよ羽澄ちゃん！ もっとゆっくり……！」

「ゆっくりなんてイヤああああ！ ご主人様、もっとあたしと気持ちよくなろおおお！」  
処女を失ったばかりの羽澄を氣遣ったつもりだったが、彼女は不満げにお尻を振って抽

送をおねだりしてきた。上下左右に暴れる腰が、目茶苦茶にペニスを扱く。未熟できつい膣肉に揉みしだかれて、解き放ちたい欲求が身体の奥で激しく疼く。

「は……はああッ！ 羽澄、ちゃん……羽澄ちゃんっ、おとおああッ！」

射精衝動が波となつて背筋を走った。衝動を抑えきれない孝也の身体は暴走を始め、機械仕掛けのように小刻みな動きで膣を擦りまくった。温かい肉穴の中で勃起が震える。硬く張ったカリ首と柔膣襞が擦れるたびに頭の中がピンクに染まる。

「んあああ……ふあああああつ、ごとお主人ふあああああつ……！」

羽澄も孝也の背中に爪を食い込ませ、不器用な腰使いでペニスに濡れ処女肉を擦り付けた。荒い呼吸の少女が、犬のように舌を伸ばす。それを孝也が夢中で舐めると、ざらつく味蕾同士の触れ合いが、二人の身体に妖しく甘美な電流を流した。

「お……あああああッ！ うあ、あッ、がああああああッ!!」

「ふあああ!! な、何これっ……頭、痺れりゆっ！ にや、にやんにも考えられな……ンひゅああああ、む……ふあああああッ!!」

孝也の肉槍が狂ったように少女を突く。羽澄の腰も盛んに踊って、破瓜の血混じりの濡れ肉で勃起ペニスを舐める。

「は……羽澄ちゃん！ はああ羽澄、ちゃんッ！ 出したい、出る、出したいっ！」

「うん、あうん！ ください、ご主人様のおお、あたしの膣に、いっぱいっばいッピュッピュしてえええッ！」



孝也の疑問など問題にせず、羽澄はまだ柔らかい肉塊を、ぱくつと口に含んだ。ゆみかから腕を解放されて、腰に抱きつき本格的な口唇愛撫を開始する。

「う……はああああ……」

突然の口唇奉仕で腰が引ける孝也の手を、祭理が握り締めた。それが、ご主人様を逃がさないためか、それとも別の意味なのか、少女メイドの口腔愛撫に浸り始めた身では、考えることができなかった。

いよいよ、その日がやって来た。会場はスタンド形式のライブハウス。この手の施設にしては大規模で、収容人数は三百人を超えるらしい。開場直後ですでに超満員。祭理や羽澄の閑散としたイベントを見た後では、信じられないくらいの盛況ぶりだ。

果たしてこの中の何人が、祭理たちに興味を持って来てくれたのだろうか。三人のシルエットしか見せないというホームページでの煽り方は、効果があつたのだろうか。

「いやあ、まさか君からお誘いをいただけるとは思わなかった」

「阪井くんだっけ？ 今日出演する新人、実はちょっと気になってたんだ。ありがとう」隣には先輩の桶山健太。さらに、桶山の友人とその彼女が立っている。少しでも宣伝に貢献できればと思って桶山のツテを頼ってみたが、これだけしか集められなかった。

開演まで三十分を切った。孝也まで心拍数が上がってくる。あまりに緊張が高まりすぎて、メール着信を知らせる携帯の着信音で心臓が止まりそうになった。

「おいおい阪井、携帯は切っておけよ。マナーが悪いな」

「す、すみません、先輩。うっかりしてました」

これは確かに孝也の不注意だ。それでも電源を切る前に、とりあえずメールをチェックする。だが、そこに表示された短い文面は、異様な緊迫感に満ちていた。

『ご主人様、助けてください！』

差し出し人は祭理だった。こんな本番直前に助けを求めてくるなんて、何かトラブルが起きたに違いない。心配になった孝也は桶山たちにトイレと偽り、ステージ裏に急いだ。

「でも、警備の人とか、いるんじゃないのか……？」

その障害に阻まれることはなかった。大勢の関係者が行き交う中、駆け寄って来た羽澄が、自分の身分証を孝也の首にひよいと掛けてスタッフに見せかけ、何食わぬ顔で孝也を楽屋に連れ込んだのだ。流れるような一連の動作に、その場の誰も異状に気づかない。

デビューイベントだからお祝いの花でいっぱいかと思っていたのに、楽屋は殺風景だった。レコード会社とイベント企業、そして所属事務所からの三点だけ。あとは、会議用の長テーブルに、彼女たちの私物が無造作に置かれている。

「ご、ご主人様！」

パイプ椅子に座っていた祭理が、泣きそうな顔で立ち上がった。そんなに緊張しているのかと思ったが、様子がおかしい。頬は赤いし、ステージ衣装のスカートを掴んで内腿をモジモジ擦り合わせている。

だが、呼び出されるほどの非常事態は見られない。首を傾げて尋ねると、祭理は困ったように眉を下げ、部屋の隅——黄色いカーテンで仕切られた簡易更衣室を目線で指した。

——あ、はああ……あああ……あんつ。ン……く、ふ……うン……。

静かな部屋に響く、妖しい喘ぎ声。カーテンの向こうから漏れる熱い吐息にギョツとする。下の隙間から飛び出した素足の足首が、綺麗な爪先を、時折切なそうに曲げる。

「まさか……ゆみかさん!!」

何をしているのか、孝也にはすぐ見当がついた。だがなぜ今、このタイミングで。

「あたしもに分からないわよ!　ずーっとソワソワしてると思ってたら、突然カーテンの中に入って、ひとりで始めちゃったんだから!」

羽澄も困惑しているようだ。本番まで二十分を切った。オナニー中の女性に声を掛けるのは気が引けるが、そうは言っていられない。

「……ゆ、ゆみかさん時間だよ。お楽しみの最中に悪いけど、お客さんが待つてるよー」

「あ……わ、分かてるう……。で、でも……お客さんが、いっぱい、だから……今日は失敗できないから……あんッ、ふうん、ンきゆうふああああ……!」

「お客がいっぱいって……まだステージにも上がってないじゃないですか!」

つい忘れていたが、ゆみかはああ見えて極度の上がり性で、緊張が性欲に転化されてしまう。しかしそれは、観客の視線に晒されるからだっただけはず。

「ス、ステージに上がってからじゃ、遅いから……くふうん!　今のうちに身体を鎮めて



おこうと思っただけど……ああッ！」

ゆみかがカーテンから飛び出した。恥液で濡らした指先で孝也の首に抱きつく。

「ご主人様あ！ わたしの中、ご主人様の精液でいっぱいにして！」

「え、ええええ!!」

「お、お腹にご主人様を感じていれば、安心できると思うの。だから……お願い！」

切実な声で訴えてくるが、そんなことでピンチを凌げるのだろうか。だが考えている時間はない。孝也はゆみかの身体を仰向けに床に寝かせた。

「は……早く、ご主人様……はあつ、きゅうう……!!」

しかし彼女は、身体の疼きに操られるように跳ね起きて、孝也の腰にしがみついた。まるで理性を失っているかのような荒い呼吸でジーンズのファスナーに手を掛けるが、冷静さを欠いてうまく開けられないでいる。それが、ゆみかばかりか孝也までも焦らす。

「ま、待つて！ 俺がやるから、少し待つ……おうあッ！」

やっこの思いでファスナーを開け、飛び出す勃起にゆみかは息もつかずに食いついた。待ち焦がれた御馳走の、汗の味までも味わうように全体を舌で舐め尽くす。

「ふあ、あふつ。ちゅばッ、ちゅぶちゅば、じゅぶ、れろ……じゅばあッ!!」

「ふううあッ！ ゆ……ゆみかさ……ふううつあああッ!!」

張り詰めた裏筋を逆撫でし、笠を張ったカリ首の段差を甘噛みし、鈴口から粘液を吸引して勃起を震わせる。あまりにも性急なフェラチオに、孝也の頭の快感処理が追いつかな

い。下半身から力が抜けて、孝也は床に跪いた。ゆみかはそれを抱きとめて、今度は唇を奪いにきた。膝立ちで抱き合い、唾液に濡れた舌を挿し入れてくる。

「ゆ、ゆみかさん……はあああ……!!」

孝也も彼女の欲情に引き込まれ、甘い舌を夢中で吸った。長身の身体がのし掛かってくる。両腕が背中に巻きつき、かぶりつくように唇を重ねてくる。孝也は激しいキスに身震いしながら、緩く開いた彼女の脚の間に指を滑り込ませた。

「きやふあああああつ!!」

指先が陰唇に触れただけなのに、彼女の身体が弓なりに仰け反った。そこは、さっきのオナニーで恥液がたつぷり。指を伝って垂れるほどに潤っている。孝也は、その濃厚な蜜を中指と薬指に絡め、二本まとめて膣口に突き刺した。

「ふひやあうああああん、あああああああああ!!」

ゆみかが鋭い叫びを上げる。声の大きさに焦った孝也は、唾然となつて見詰める残りの二人に指示を出した。

「佐倉さん、誰も来ないようにドアのところで見張つて。羽澄ちゃんは手伝つて!」

「は……はい!」

裏返った声で返事をして、ドアに直立不動で張りつく祭理。一方、なぜか余裕を取り戻したらしい羽澄はゆみかを見下ろし、淫靡な笑みを浮かべた。

「ご主人様のお手を煩わせるなんて、悪いメイドね。これは教育が必要かしら?」

さんざん「教育」された仕返しのもりだろう。やけに嬉しそうな顔で先輩の顎を撫でる。ゆみかは後輩にいたぶられることにすら興奮し、腰をクネクネくねらせる。

「ご、ごめんなさいハズミちゃ……ふああああ……ンむつ、むぐうううッ!!」

羽澄が、キスでゆみかの口を塞いだ。舌で舌を擽め捕って喘ぎを封じる。そのまま体重を掛けて、先輩の悶える身体を床に押し倒した。

——ちゅ、ぷちゅ、ちゅろちゅろ、ちゅうううう!

二枚の舌が軟体動物のようにぬらぬらと絡み合うのを見ているだけで、孝也のペニスも興奮して上向いて涎を垂らす。だが呆然と見ているわけにもいかない。羽澄がゆみかを押しさえてくれている間に、だらしなく投げ出された膝を持ち上げる。

すると、長身のアイドルは自ら太腿の裏を掴んで脚を開いた。オナニー中に下着は脱いでいたらしく、スカートの中は秘唇がぱっくり開いて、ベタベタの愛液を垂れ流す。

「は、早く……。ふふああああ……!」

卑猥にうねる腰。濡れた恥褌に龟头を舐められ、孝也も勃起を疼かせた。もう我慢できない。彼女の膝裏を掴んで、百八十度に脚を開き、涎を垂らす淫裂に肉棒を突き入れる。

「ン……んあああ……あああああああッ! ああッ、あうンむッ!」

喘ぎを羽澄に吸い取らせ、孝也は腰を奥まで押し込んだ。蕩けるような膣肉がペニスに絡み、包み込む。悶える腰が大きくうねり、抽送を促した。

「ゆみかさん……いきます!」

「ちようだい！ ご主人様の……おちんちん……ふあああ……！」

この気持ちいい柔肉を、もっと味わっていたい。しかし、一刻も早く彼女をイカせて、ステージに送り出さなくてはいけなかった。孝也は自分の楽しみを我慢して、一氣にとどめを刺すため前後に大きく腰を振り始めた。

「お……あつ！ ……ゆ、ゆみかさんの中……あう、ふぐ……ぐ、おおおおつ！」

だが引き抜くたび、突き入れるたびにカリ首と膣壁が擦れ、ゾクゾクする快感が孝也を苦悶に陥れる。ゆみかの口を塞いでいながら、自分が声を上げるわけにはいかない。しかし我慢しようとするほど、気持ちよさが何倍にも膨らんで呻きが漏れる。

そんな淫猥な空気の中、ふと、耳に唾を飲み込むような音が聞こえた気がした。誰がそうしてもおかしくない状況だが、気になって、快感に悶えながら首を巡らす。

ドアを背にして立っている祭理が、汗ばんだ顔でスカートを握り締めていた。両手でグツと、何かを堪えているように見える。だが、それ以上観察している余裕はなかった。激しく波打つゆみかの腰に肉棒を扱かれ、頭の芯まで快感に侵食され始める。

「ふああああ、すごい……！ ご主人様のおちんちん、私の中でゴリゴリっして……ふああああ、凄い、す……すごおおおおおっ！」

衣装の上から自分の胸を揉みしだき、勃起を咥えた蜜肉が急くように精液をねだる。

「あうん、むあつ……ん……ご主人ふあま……しえい液……欲し……ふみゅうん！」

膣で肉棒を扱い、羽澄の頭を掻き抱いてキスを食る。年上女性の痴態にペニスが絶頂の



疼きを感じた。強張る勃起で膣肉を掻き回し、ゆみかも絶頂に追い詰める。

「ふああああッ、イク……イクう！ ご主人様イッちゃう、イクッ！」

「お……俺も……俺も、ゆみかさん、うあ、うああああッ!!」

——どくんっ、どびゆるっ、びゆるるる、びゆるううううっ！

繋がった二人の身体が仰け反って硬直する。同時に快感の絶頂に達する。孝也は、複雑な表情で立つ祭理に見守られながら、ゆみかの胎内にお守り代わりの精を解き放った。

役目を果たした孝也が会場に取って返した時、すでにライブは始まっていた。オーブニングの曲を歌い終えたところで、何とか出番には間に合ったようだ。トークを挟んでもう一曲。その後が、エプロンドレスの出番になっている。

「さて、ここでゲストの登場です。今日は、わたしのお友達が来てくれるの！ 結成されたばかりのグループで、このステージがお披露目になるの！」

トークパートで、マイクを持ったアイドル少女が簡単な説明を始めた。違う事務所なのに、時間を掛けて観客の期待を目一杯に煽ってくれる。

「……いよいよだね」

桶山の友人たちが、顔を寄せ合って楽しそうに言葉を交わす。しかし、孝也は不安だった。ゆみかの性癖もさることながら、それ以上に祭理が心配でならなかったのだ。

あの後、ゆみかに中出した孝也に彼女が近寄ってきた。真剣な眼つきで、何かを訴え

るように唇を結んで。本番前の緊張とは明らかに異質の切迫感が、表情に滲み出る。だが話は聞けなかった。スタッフが彼女たちを呼びに来たからだ。

（佐倉さんは、何が言いたかったんだろう……）

気になって集中できない。もし祭理の中に心残りがあって、それが解消できずに失敗したらと思うと、罪悪感で胸を掻き篁りたくなる。

「——それでは登場してもらいましょう！ アイドル界の新星、三人の美少女メイドグループ、『エプロンドレス』です！」

ご大層なフレイズの羅列と共にステージが暗転。白いスモークの中、スポットライトを浴びた三人のシルエツトが浮かび上がる。

赤青黄、三色のメイド服が姿を現すと、個性的ないでたちに、どよめきが起きた。なんだこりゃといった反応だが、興味を引かれないよりは、ずつといい。キャッチーな衣装、そして個性的な三人の美少女に観客がざわめく。最初の掴みはこれでいい。

「初めまして！ わたしたち、あなたにご奉仕するメイド隊、エプロンドレス、です！」  
何度も練習した決めセリフとポーズもビシッと決まった。孝也の心配は杞憂だったようだ。羽澄はもちろん、ゆみかも祭理も、みんな笑顔が生き生きとしている。

だが、観客の反応は鈍かった。登場した瞬間が最高潮で、その後はボルテージが落ちていく一方。想像していたのとは違う光景に、孝也の胸に暗雲が立ち込める。

（やっぱり、このコンセプトは失敗だったのか——!!）

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**



竹内けん

Takent Ken presents harem series official guide

# ハーレムシリーズ

## 公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、  
「歴史年表」「人物相関図」  
等々あの超人気シリーズの  
世界観を網羅した  
**完全ガイドが登場!!**

特別描き下ろし  
イラストも多数収録!



*Now On Sale!!*

A5判/定価990円(税込)



特設サイトはこちらからアクセス!!



<http://ktcom.jp/harem/>

# キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



詳しくはKTCの  
オフィシャルサイトにて！

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトに続々配信中!!



# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのバックナンバーも買えるよ!
- ジャンル別で作品も選べて超便利!
- 二次元編集部のお楽しみBlogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!